Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

msz みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 36　2020 冬　最終号（表示価格は税別です）
113-0033 東京都文京区本郷2-20-7　tel. 03-3814-0131　www.msz.co.jp

新たな時代への緩（ゆる）みなき介入

――ジェイムズ・クリフォードの軌跡

太田好信

『リターンズ』は、『文化の窮状』（原典は一九八八年、邦訳は二〇〇三年に人文書院から刊行）、『ルーツ』（原典は一九九七年、邦訳は二〇〇二年に月曜社から刊行）に続く、ジェイムズ・クリフォードのシリーズ三作目の論集である。彼にとり思考は状況に反応し、その意味で三作目であるからといって最終的結論の提示ではなく、『リターンズ』も新たな時代への介入の軌跡である。どんな状況局面において、どう自らの思考を開けるのかと自問し、閉塞しようとする物語に抗う努力を続けてきたといえる。

さて、『文化の窮状』の枠組みは、クリフォードが七〇年代から八〇年代にかけて関心をもっていたフランス民族学史――宣教師であり民族誌家でもあったモーリス・レーナルトの伝記が博士論文であった――さらにはシュルレアリスム、フランス現代思想に根差した文学理論などである。一九七八年、彼はカリフォルニア大学サンタ・クルーズ校に着任するが、同僚となった故ヘイドン・ホワイトの歴史表象に関する思索も、『文化の窮状』に影響を与えている。クリフォードは、一九四五年以降の脱植民地化の影響により変貌しつつある世界が民族誌、文学、芸術、ミュージアムなどについて反省を迫る状況について、これらの枠組みから学んだ批評を実践した。

『ルーツ』において、彼の関心はカルチュラル・スタディーズへと大きく舵を切る。一九九〇年、サンタ・クルーズ校には、カルチュラル・スタディーズ・センターが創立され、その後の知的交流を支える。スチュアート・ホールやポール・ギルロイといったイギリスをベースにした研究者たちとの交流が深まった時代である。クリフォードは、『ルーツ』において、グローバル化による急速な世界の変化を理論化するために、移動、ボーダー横断、ディアスポラ、転置、旅という諸概念を鍛え上げた。たとえば、前作のように、ミュージアムを西洋の権力的啓蒙装置として批判することよりも、ミュージアムをコンタクト・ゾーンと呼び、キュレイターと先住民たちとの間でおこなわれる複雑な交渉過程を描写することに、『ルーツ』の重点は移行している。

今世紀になり、不均衡に継続する脱植民地化、グローバル化、ネオリベラル資本主義、多文化主義の隆盛などにより変貌する世界で、先住民たちが、異なった近代への経路を示すかのように、世界史のアクターとして回帰してきた。『リターンズ』は、この状況を俯瞰するのではなく、現場に近い、低い目線から描きだす。つまり、（民族誌的・歴史的）リアリズムの実践である。「二一世紀において先住民になるとは」というプロセスに関する問いを立て、その状況を翻訳、パフォーマンス、節合というカルチュラル・スタディーズの鍵概念を用いて分析する。本書においても、ミュージアムに収蔵されてきた先住民由来の多くの器物の行方をめぐり、先住民たちのエイジェンシー（行為主体性）により導きだされる、ミュージアムという概念自体の予期せぬ可能性を示唆している。

こうして、一方において、クリフォードの理論的遍歴をフランス思想からカルチュラル・スタディーズへの転回と総括することは可能であるが、他方において、先住民の現在というテーマは変化しながらも持続する関心といえる。一例として『文化の窮状』の最終章では、マシュピーが連邦政府から部族認定を求めるために起こした訴訟の裁判を傍聴し、当時のアメリカで先住民になるというプロセスが孕む課題を論じている。また、『ルーツ』の最終章には、一九世紀初頭、ロシア人居住地であったカリフォルニア州フォート・ロスでラッコの毛皮採取のために動員された先住民たちの歴史を知り、定住ではなく、移動する先住民の姿を語る。『リターンズ』の第四章、「イシの物語」では、「最後のカリフォルニア・インディアン」――つまり消滅する存在――といわれてきたイシには、現在から未来へと向かう別の物語もあることを示す。それは、イシに「第二の生命」を与える作業ともいえる。

クリフォード自身も、メンターであり友人でもあると認めているスチュアート・ホールは、「本質化された黒人主体の終焉」という主張をおこなっているが、ホールの反本質主義のもとで知的訓練を受けた研究者からすれば、土地との絆を強調する先住民たちは排他的土着主義者としか映らないかもしれない。だからこそ、しばしば先住民はディアスポラと対立的に語られてきた。しかし、クリフォードは先住民性も本質ではなく、近代における政治や経済要因と文化との節合というプロセスを度外視しては捉えられないという。一九七一年のアラスカ先住民権益処置法制定後の文化復興とユーピックという先住民アイデンティティが形成されるプロセスを、そのような節合の事例として描いている。

クリフォードは、自らの思考がどこか別の場所に漂着し、そこで独自の未来に向けて開花することを歓迎するだろう。二〇二〇年のいま日本でも、もとより制約はあるものの、世界の先住民と同じように、アイヌ民族的近代とは何かという問いについて考えるための材料――アイヌ施策推進法、国立アイヌ民族博物館など――も多く存在する。

翻訳を広義の意味生産プロセスと捉えれば、本書が翻訳されたことにより、『リターンズ』は日本でも新たな意味を担う可能性に満ちている。クリフォードの著作が、これまで以上に多くの読者の手に届くことを期待したい。（おおた・よしのぶ　文化人類学　九州大学名誉教授）

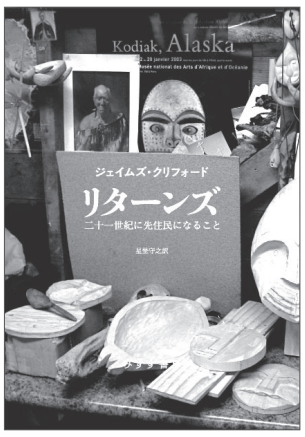
現在進行形の文化人類学

ジェイムズ・クリフォード
《リターンズ　二十一世紀に先住民になること》
星埜守之訳

本書のプロローグでクリフォードは、一九七〇年代初頭に留学先のロンドンで人類学の大家がこう言ったのを想起している。リベラルな学者は自分たちを批判的知識人、先住民文化の価値の代弁者、民衆の擁護者だと考えていたのに、いまや突然、帝国の手先になってしまった！

それから五十年、「西洋」にかぎらず、ジェンダーや人種やセクシュアリティに関連しても脱中心化が進んだことを振り返りつつ、クリフォードは「自分を歴史的存在と感じはじめている」という。

『リターンズ』は独立した三部から成っている。第一部は今日の先住民を理解する上での方法を理論的に示している。対して第二部は、半世紀前の日本でも読まれた『イシ』（最後の野生インディアン！）の主人公をめぐるその後の変容を、消滅から再生への道筋として、やや想像的に物語られる。そして第三部は、オセアニアの学者にして作家エペリ・ハウオファの「希望」についての講義に続けて、アラスカ先住民の文化遺産プロジェクトの紹介と、コディアック島で展開されるアーティストたちの仮面制作と異文化交流に、時代の変化の具体例をもとめている。

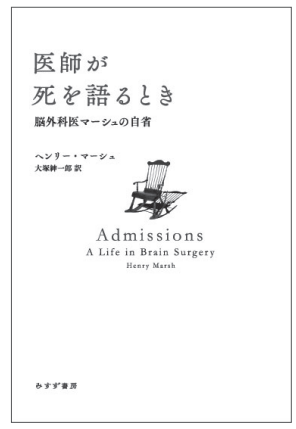


脱植民地化、グローバル化、先住民の生成という三つの歴史と語りを引き受け、それを議論するため民族誌的・歴史的なリアリズムを方法とした本書は、複雑なこの世界のありようを単純化してみせるのではなく、粘り強く「ごつごつした迫真性」をもって説いてゆくのである。

『文化の窮状』『ルーツ』と、文化人類学の批判的歴史家として学問と教育を実践してきたクリフォードが後ろ向きに前へ進んだ、まさに現在進行形の著作と言えよう。［文化人類学・現代思想・批評］【十六日刊】（A5判・408頁・五四〇〇円）

イギリス、ネパール、ウクライナ 医療現場で想う

ヘンリー・マーシュ
《医師が死を語るとき
脳外科医マーシュの自省》
大塚紳一郎訳



「安楽死が認可されていない場合に私たちが迫られる選択は、すぐに悲惨な死を迎えるか、数カ月以上先延ばしにして、後日悲惨な死を迎えるかのどちらかということになる。驚くには値しないが、私たちのほとんどは後者を選択し、どれほど不快なものであっても治療を受ける」

イギリスを代表する脳神経外科医マーシュは、国民保健サービス（NHS）によって様変わりした医療現場に辟易し、勤めていた病院を去る。旧知の外科医たちを頼り、行きついた海外の医療現場――貧困が色濃く影を落とす国々の脳神経外科手術の現場でも、老外科医は数々の救われない命を目の当たりにする。

私たちにとって「よき死」とはいったい何なのだろうか？　そして、私たちの社会はそれを可能にしているのだろうか？

マーシュは実感を込めてラ・ロシュフコーの言葉を引く――「私たちは太陽も死も、直視することができない」。該博な知識から生命と人生の意味を問い、患者たちの死、そしてやがてくる自らの死に想いをめぐらせる自伝的ノンフィクション。［医療読み物・ポピュラーサイエンス］（四六判・320頁・三二〇〇円）

診察室のすれちがいを科学する

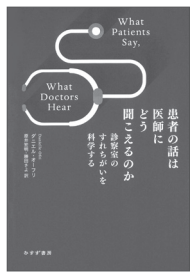
ダニエル・オーフリ
原井宏明・勝田さよ訳
《患者の話は医師にどう聞こえるのか》

現代医学はMRI、PETスキャンなどのハイテク機器に夢中だが、最大にして最良の診断ツールは医師と患者の会話だ。だが、患者が「しゃべった」ことと医師が「聞いた」ことは、いつでもいともたやすく別のストーリーになる可能性を秘めている。

症状を伝えたい一心の患者は、一刻も早く医師に言い分を主張したい。一方、つねに数多くのタスクを抱えながら、効率を上げろという圧力にさらされている医師は、一刻も早く診察を結論に導こうとする。さらには医師と患者双方の固定観念や無意識の偏見なども加わり、コミュニケーションのミスはすぐに医療ミスへとつながっていくこともありうるのだ。

患者は、きちんと自分の症状を伝える努力をしているだろうか？　医師は、患者が本当に伝えたいことを受けとる努力をしているだろうか？

米国の内科医が心揺さぶるヒューマンストーリーを通して、避けては通れぬ医師と患者のコミュニケーションの問題を徹底分析する。［医療読み物・ポピュラーサイエンス］（四六判・304頁・三二〇〇円）



『大脱出』の著者が探る未来

アン・ケース／アンガス・ディートン
松本裕訳
《絶望死のアメリカ
資本主義がめざすべきもの》

「絶望死」とは、オピオイドなどの薬物過剰摂取、アルコール中毒、自殺による死を指す。アメリカでは近年、低学歴の中年白人労働者の絶望死が急増している。

「前著『大脱出』では、本書の著者のうち1人が過去250年間における人間の進歩についての前向きな物語を綴った。…ショーの主役は資本主義。グローバル化のポジティブな力に支えられ、悲惨な貧困から何百万もの人を解放した。…本書は、それと比べるとずっと悲観的だ。絶望と死を記録し、資本主義のさまざまな側面を批判し、グローバル化と技術の変化が今のアメリカでどのように作用しているかに疑問を投げかける。それでもなお、私たちは楽観的だ。…資本主義の未来は希望であるべきで、絶望であるべきではないのだ」（はじめに）

社会、経済、文化を俯瞰しつつ絶望死の原因を探り、資本主義が目指すべき道を探る。［経済学］【一月中旬刊】（四六判344頁・予三六〇〇円）

▽ディートンは二〇一五年ノーベル経済学賞受賞。既刊『**大脱出**』松本裕訳（三八〇〇円）

「安保が第一、憲法は第二」の深層

古関彰一《対米従属の構造》

〈国体のもとに帝国憲法は存在し、安保のもとに日本国憲法は存在することになった。しかも国体の中核である天皇も、安保を動かす米国政府も、どちらも、たとえば「勅語」であれ、「ガイドライン」であれ、どれをとっても国民は言うまでもなく国民代表（国会議員）も手を出せない「絶対的な最高の存在」である。つまり、国民から見れば明治期以来、天皇制も日米安保も、手の届かない遠い存在という意味では、近代一五〇年を一貫していることになる〉

第九条を中心とする日本国憲法と日米安全保障条約。明らかに背反するこの二つを、背反しないかのようにして、占領期以後の日本は歩んできた。しかし子細にみると、「憲法も、安保も」ではなく「安保が第一、憲法は第二」となってきたことがわかる。

指揮権密約から安保改正・沖縄返還交渉での核密約、日米同盟と有事法制、自民党の憲法改正案、安保を支える国体思想まで、「対米従属」という観点から、第一人者が戦後の日米関係を再検討する。［日米関係・現代史］【十六日刊】（四六判・352頁・三六〇〇円）

政治的リアリズムからの批判的考察

ローレンス・ハミルトン
神島裕子訳
《アマルティア・センの思想》

「なぜセンが政治の現実の追求にそれほど熱心ではないのかに関する重要なヒントは、ケイパビリティと機能という言語そのものによって作り出された難読化にあるのかもしれない」

いまや「正義」について語る際には避けて通ることのできない経済学者・哲学者となったアマルティア・セン。彼は、その広大な思想でわれわれに何を伝えようとしてきたのか？

本書はセンの多岐にわたる業績を、「選択」「ケイパビリティ」「自由」「正義」「デモクラシー」の五つのテーマに沿って解説する。ときに政治的リアリズムによる批判的視点で考察を交えながら、センの思想の真に意図するところを検証する。

今後も経済学、倫理学、哲学、政治学においてさまざまな角度から言及されるであろうセンの思想を俯瞰できる、アマルティア・セン研究の最初の一歩として読まれるべき一冊。［政治思想・倫理学］【一月中旬刊】（四六判320頁・予四二〇〇円）

▽関連書 **O・オニール『正義の境界』**神島裕子訳（五二〇〇円）**D・ジョンストン『正義はどう論じられてきたか――相互性の歴史的展開』**押村・谷澤・近藤・宮崎訳（四五〇〇円）

▽既刊より **古関彰一・豊下楢彦『沖縄　憲法なき戦後』**（三四〇〇円）**明田川融『日米地位協定』**（三六〇〇円）**J・W・ダワー『昭和』**明田川融監訳（三八〇〇円）**橋本明子『日本の長い戦後』**山岡由美訳（三六〇〇円）

民主主義とナショナリズムのディレンマを越えて

呉叡人
駒込武訳
《台湾、あるいは孤立無援の島の思想》

台湾は近代以降、清、日本、中華民国、アメリカという複数の帝国による連続的な支配を受け、またその複雑な民族構造のために統一的なナショナリズムや共通の歴史認識の形成を阻まれてきた。台湾の主体化を達成すべく、人々は歴史を紐解き、過去の国家暴力や不正義をただして内部的な分断を乗り越えることを通じて民主化を推し進め、生存空間を共にする者たちの同盟としての多元・民主・平等に基づく「台湾ナショナリズム」を志向した。しかし外部的には、国際的な主権国家体制からの排除や、新興の中国を含む諸帝国の狭間にある地政学上の困難を自力で克服することはできず、その命運はいまなお強権に掌握されている。台湾の市民社会はそうした賤民（パーリア）的境遇を自覚的に引き受け、帝国と資本主義による支配に対抗することを通じてさらに民主主義を定着させた。そしていまや普遍的価値を社会に体現することに世界への回帰の道を見出し、行動している。

政治学者による二十年におよぶ持続的思索の集成。

［政治思想］【一月下旬刊】（四六判448頁・予四五〇〇円）

巨匠が室内に託して紡ぐ生の記憶

マリオ・プラーツ
上村忠男監訳　中山エツコ訳
《生の館》

綺想とデカダンスの英文学研究者として名高いイタリア人が一九三四年から六九年まで住んだローマの家の部屋をひとつずつめぐり、美術品・家具の思い出を通して時代と人生を綴る極上エッセイ。

食堂・大広間・婦人用私室、寝室、子ども部屋…を、ナポレオン帝政様式の家具や絵画、蔵書棚が埋め尽くす。ものの記憶から過去の時代や物語が紡ぎ出されるさまは、古代からルネサンスへと伝承した記憶術の再現のようだ。文学者から見たファシズム。欧州の盛衰。学問修業。愛した女性たち。結婚と離婚。コレクターの業。

やがて、著者はたそがれの中で老いと自らの骨董品化に向きあい、悲哀が光を放つ。

著者はヴィスコンティ監督の名作映画『家族の肖像』の老教授のモデルと目される。亡くなるまで住んだローマの次の家は現在、「マリオ・プラーツ博物館」として公開されている。

折り込みのカラー口絵八枚のほか、前世紀欧州の室内装飾を伝える写真多数。［エッセイ・イタリア文化］【十六日刊】（四六判・680頁・八八〇〇円）

みすず書房新刊

（2020・6〜10）

東京・文京・本郷2
℡〇三三八一四〇三三
（価格は税別です）

シリア獄中獄外
サーレハ　16年におよぶ監獄経験、出獄後の元政治囚の生活、国内情勢ほかシリア人作家による政治的省察。**岡崎弘樹訳**　三六〇〇円

それでも。マキァヴェッリ、パスカル
ギンズブルグ　権力と宗教の言論の場で、制約を可能性に変えようとした者達の継承関係。隠れた政治神学史。**上村忠男訳**　五七〇〇円

どっちの勝ち？
トニ・モリスン　黒人女性ノーベル賞作家の現代版イソップ物語絵本。現実を生きぬくための知恵とは？　**鵜殿・小泉訳**　三〇〇〇円

ゲーデルの悪霊たち
論理学と狂気
カスー＝ノゲス　ゲーデル文書の解読を軸に、不完全性定理を生んだ二十世紀の天才の思考と心の真相に迫る。**新谷昌宏訳**　五五〇〇円

パウラ・モーダーゾーン＝ベッカー
ボイス　自然としての裸の自画像を絵画史上初めて描き、表現主義への扉を開いた女性画家の決定版伝記。**藤川芳朗訳**　八〇〇〇円

宇宙・肉体・悪魔
理性的精神の敵について［新版］
バナール　のちの科学者、SF作家に多大な影響を与え、今なお刺激に満ちた人類未来論。解説・瀬名秀明。**鎮目恭夫訳**　二七〇〇円

日ソ戦争 1945年8月
棄てられた兵士と居留民
富田武　「触れたくない敗戦史」ゆえに放置されてきた「日ソ戦争」の戦闘の詳細とその前後。七五年目に明かされる真実。**三八〇〇円**

マーシャル・プラン
新世界秩序の誕生
ステイル　「最高の研究だ」P・ケネディ。冷戦秩序を形作った巨大計画の全貌を新資料を駆使して描く決定版。**小坂恵理訳**　五四〇〇円

ウイルスの世紀
なぜ繰り返し出現するのか
山内一也　新型コロナウイルスを過去五十年間の数々の新興ウイルスの系譜に置き、社会との関係を俯瞰する。好評重版。**二七〇〇円**

九津見房子、声だけを残し
斎藤恵子　「これが日本で女が初めて参加したメーデーです」。ゾルゲ事件含め社会主義のために懸命に行動した女性の軌跡。**三六〇〇円**

「第二の不可能」を追え！理論物理学者、ありえない物質を求めてカムチャッカへ
スタインハート　不可能と言われた物質形態「準結晶」の証明に挑んだ研究の軌跡。痛快無比の科学読み物。**斉藤隆央訳**　三四〇〇円

アメリカの世紀と日本
黒船から安倍政権まで
パイル　敗戦国日本は無条件降伏の呪縛と米国覇権をどう生きたのか。日米関係の過酷な鏡が映す日本の姿。**山岡由美訳**　四八〇〇円

心の革命　精神分析の創造
マカーリ　心を探る科学はこうして作られた。主要言語のほとんどに翻訳され世界的水準で認められた大作。**遠藤不比人訳**　八〇〇〇円

レジリエンス思考
変わりゆく環境と生きる
ウォーカー／ソルト　生態系の「自己を維持する能力」に注目して、意図しない激変のリスクを把握する。**黒川耕大訳**　三六〇〇円

RCT大全　ランダム化比較試験は世界をどう変えたのか
リー　医療からウェブビジネスまで、多様な分野でエビデンス革命を起こしつつある姿を網羅的に紹介する。**上原裕美子訳**　三三〇〇円

絵の幸福　シタラトモアキ論
秋庭史典　希望とは、自分を自分として生きること。絵とは何かがわからなくなった画家のリハビリを、美学者が追った。**四〇〇〇円**

ファシズム　警告の書
オルブライト　元国務長官が実体験を基に発する警告。トランプ時代を総括し、新時代の指針となる一冊。**白川・高取訳**　三〇〇〇円

文学は実学である
荒川洋治　この世をふかく、ゆたかに生きるために。二八年間の文章から選んだ八六編。初ベストエッセイ集。好評重版。**三六〇〇円**

王女物語　エリザベスとマーガレット
クローフォード　家庭教師として、未来の英国女王の少女時代、青春時代をそば近く過ごした十七年の回想。**中村妙子訳**　三六〇〇円

イエスの意味はイエス、それから…
エムケ　#MeTooの先にあるものは。暴力を問い直し、新たな言葉を探る。小さな声で世界を変えていく一冊。**浅井晶子訳**　二八〇〇円

シネアスト宮崎駿　奇異なものの詩学
ルルー　『風の谷のナウシカ』『千と千尋の神隠し』ほか、精緻な作品分析を積みかさねた傑作モノグラフィ。**岡村民夫訳**　三六〇〇円

ノーザン・ライツ
ノーマン　一九五〇年代カナダの風景の中で少年の孤独と成長を描き出し切々と胸に迫る全米図書賞候補作。**川野太郎訳**　四〇〇〇円

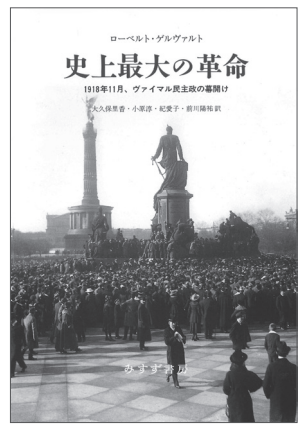
ヴァイマル共和国は、先進的な憲法や女性参政権などを実現しながらも、ナチ政権の到来により崩壊したことから、民主主義の失敗の象徴として注目されてきた。それは滅亡を運命づけられた民主政だったのか。

ヴァイマル共和国の成立に至る1918年の11月革命を、著者ゲルヴァルトは「史上最大の革命」と名付ける。これは当時の日刊紙の主筆ヴォルフの言葉で、君主政から民主政へと平和的に移行したことを称賛している。その後ナチ政権は1918年11月を忌むべき犯罪の日として喧伝した。

著者はヴァイマル期を「歴史の教訓」という像から、より立体的なものにすることを試みる。当時の政治家、極左と極右、一般の人々など様々な立場からの証言、そして公文書、機関紙、日記などの膨大な資料から、革命前夜とヴァイマル共和国の成立、それによる国家と社会の構造転換を一望する。

実像を活写、現代史の死角を照らす

ローベルト・ゲルヴァルト
《史上最大の革命　1918年11月、ヴァイマル民主政の幕開け**》**
大久保里香・小原淳・紀愛子・前川陽祐訳



従来の英仏からの視点ではなく、中東欧諸国との相互比較、第一次世界大戦後のヨーロッパの体制変化などの広い視点から、これまで看過されてきたヴァイマル期の実像を明快に描き出し、現代史の死角に光を当てる。［現代史］（四六判・448頁・四六〇〇円）

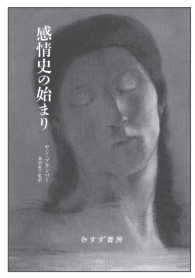
▽著者既刊『**敗北者たち――第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか　1917–1923**』小原淳訳（五二〇〇円）

歴史学研究の斬新な試論

ヤン・プランパー《感情史の始まり》
森田直子監訳

近年、「感情」にアクセントを置いて学問のあり方を見直す動向が高まっている。「感情心理学」「感情の社会学」「感情の政治学」云々。歴史学の分野でも、出来事の理解や歴史文書の読み方に「感情」という視点が導入されるようになった。動物やヒューマノイド機械にも感情はあるのか、感情は私たちの身体の外側に由来するのか内側に存在するのか、感情は歴史を有するのか、そうだとしたらどのような史料から読み取れるのか。

このような基本的な問いを軸に、本書は感情史研究の過去・現在・未来を概観する。なかでも本書の特徴は、感情をめぐる社会構築主義と普遍主義という二つの考え方に正面から立ち向かう点だ。人間の感情は、人類学者たちが示してきたように、時代と地域と文化で異なるものなのか、それとも、脳科学者はじめ生命科学の領域で言われるように人類共通の普遍的なものなのか。著者は二つの見方を架橋しながら、感情のあり方のグランドセオリーを展開し、歴史学における感情の扱い方の手法とその重要性を説く。新しい人文科学の可能性をひらく書。［歴史学・現代思想］（四六判・608頁・六三〇〇円）



図書館文化の未来をひらく

根本彰《アーカイブの思想　言葉を知に変える仕組み**》**

「日本で図書館は本を無料で借りられる施設であったり居場所として使われていたりしても、それ以上のものではなく社会にとって不要不急の存在でしかないのはなぜなのか」。図書館・情報学の研究者／教育者である著者は、この問いをずっと抱き、考え続けてきた。本書は、なぜ日本でアーカイブの思想が形成されていないのか、形成されにくい理由、そして、日本流のアーカイブ文化を、ロゴスを文化の基礎と考える西洋社会にその鍵を探りつつ、歴史学、思想史、文学史、教育史を横断しながら俯瞰してゆく。日本の社会にアーカイブ思想を形成してゆくための提言の書。

［目次抄］書き言葉と書物のテクノロジー／図書館と人文主義的伝統／記憶と記録の操作術／知の公共性と協同性／カリキュラムと学び／書誌コントロールとレファレンスの思想／日本のアーカイブ思想／ネット社会のアーカイブ戦略［図書館学］【一月中旬刊】（四六判・304頁・予三六〇〇円）

▽著者既刊『**情報リテラシーのための図書館――日本の教育制度と図書館の改革**』（二七〇〇円）

月刊雑誌《みすず》最近号より

［新連載］水島治郎「「隠れ家と広場」からみた移民都市アムステルダムのユダヤ人」／酒井啓子「「アラブの心臓」が息絶えるとき」／頭木弘樹「誰が道を切り開いたのか」／郷原佳以「アポカリプスとインヴェンション」／西平直「目をオフに」（十月号）。［新連載］白木賢太郎「うたかたの生物学」／小野寺拓也「感情史の視点からみるナチ体制」／矢野久美子「ローザの従姉妹」（十一月号）。松本俊彦「人はなぜ酔いを求めるのか」／西成彦「抵抗するために生き、生きるために抵抗する」／小沢信男「柴又まで」（十二月号）。（三〇〇円）

書評コラム

想像超える収容所体験

加藤聖文
ヴィトルト・ピレツキ《アウシュヴィッツ潜入記》
杉浦茂樹訳
を読む

映画化に値するすさまじい記録だ。ナチス・ドイツに占領されたポーランドの地下抵抗組織の一員だったピレツキは、1940年9月、わざと捕まりアウシュヴィッツに送られた。彼の任務は、収容所で同志を集め武装蜂起すること。

アウシュヴィッツといえばユダヤ人だが、初期はポーランド人が中心。街中で普通の市民が連行され「半人間たち」によって「原始的」に殺された。しかし、独ソ戦がはじまるとソ連軍捕虜の大量殺戮が行われ、やがてユダヤ人絶滅収容所へと変貌していった。

一方、ピレツキらポーランド人の環境は次第に好転し、収容所内の弛緩が顕著になっていく。このコントラストはアウシュヴィッツの闇の深さを際立たせる。

死と向かい合わせのなか、ピレツキは地下組織にアウシュヴィッツの真実を伝え続けた。しかし、想像を超えた真実は信じられず、「収容所を乗っ取れる機会は毎日のようにあった」にもかかわらず、蜂起は指令されなかった。結局、43年4月にピレツキは収容所を脱出して、外部から蜂起を計画するも叶わず、ワルシャワ蜂起失敗の際にドイツ軍に再び捕らえられる。

本書は、ドイツ降伏直後、祖国を愛するピレツキ大尉が上官宛てに提出した2年半にわたる任務遂行の報告書だが、アウシュヴィッツの真実を理解できない「脳なしの輩ども」に「自分の命について考えさせ」たい気持ちが抑えられず、簡潔を旨とする報告書としては失格だ。しかし、これほど読み手の想像力が試される第一級の記録はない。

ピレツキは、この報告書を提出した後、新たな任務を与えられる。祖国ポーランドでソ連の傀儡政権と戦うことだった。しかし、ピレツキは捕らえられ、同胞の手によって処刑された。彼の存在も抹殺され、報告書は40年以上日の目を見ることはなかった。独ソに踏みにじられたポーランドの現代史に封印されたピレツキの生涯は、私たちの想像を超えている。（かとう・きよふみ　歴史学者　国文学研究資料館准教授）＊読売新聞9月27日掲載書評を評者の許諾を得て転載▽『**アウシュヴィッツ潜入記――収容者番号4859**』冷戦後も長く原本のまま埋もれ2012年初めて英訳・出版された現代史の貴重な資料（好評重版、四五〇〇円）

エリオットからウィリアムズまで

ステファン・コリーニ《懐古する想像力　イングランドの批評と歴史**》**
近藤康裕訳

「文学――もっと正確に言えば〈英文学〉の中核を形成すると従来から考えられてきた一連の作家たち――は長きにわたってイギリスにおける国民的な自己定義の中心でありつづけてきた。しかし、二十世紀のはじめの数十年に、国民文学の名作の評価と、国の政治体制の特徴とその軌跡についての理解とのあいだの緊密な、妄信的とさえ言いうるような結びつきがさまざまな形で分断させられたのである。文芸批評という概念がいっそう強調されるようになっていった」

一九二〇年の『聖なる森』から一九六五年の『長い革命』、T・S・エリオットからリーヴィス夫妻、バジル・ウィリー、L・C・ナイツ、ウィリアム・エンプソン、リチャード・ホガート、レイモンド・ウィリアムズまで。歴史学と文学のはざまで同時代社会をいろどる歴史認識、自己了解への視座をもたらしてきた二十世紀中葉の文芸批評の展開をたどる。

二〇一七年度オックスフォード大学ジェイムズ・フォード記念英国史講演。［イギリス文学・文芸批評・文化研究］（四六判・400頁・五二〇〇円）

▽関連書　**ウィリアムズ『共通文化にむけて――文化研究I』**（五八〇〇円）**『想像力の時制――文化研究II』**（六五〇〇円、ともに川端康雄編訳）**オルトラーノ『二つの文化」論争』**増田珠子訳（六二〇〇円）

恒例「読書アンケート」特集掲載

一・二月合併号のご案内

二月一日発行です。ご注文は、**切手四二〇円**（誌代・送料込）をご用意いただき「**みすず2021年1・2月号希望**」とご明記の上、みすず書房営業部「みすず」係までお送りください（〒113-0033 文京区本郷2-20-7）。発行次第ご送付いたします。

電子書籍　最新4点と好評30選

＊ 電子書籍の価格は希望小売価格で表示
＊ 電子書店によって取り扱いのタイトルに若干の違いのある場合がございます

11月配信開始
患者の話は医師にどう聞こえるのか
オーフリ　原井・勝田訳　3200円

夜と霧　新版
フランクル　池田香代子訳　1200円
夜と霧　ドイツ強制収容所の体験記録
フランクル　霜山徳爾訳　1500円
生きがいについて
神谷美恵子コレクション　1200円
エルサレムのアイヒマン　新版
アーレント　大久保和郎訳　4400円
21世紀の資本
ピケティ　山形浩生他訳　4400円
貧乏人の経済学
バナジー／デュフロ　山形訳　3000円
測りすぎ
ミュラー　松本裕訳　3000円

10月配信開始
イエスの意味はイエス、それから…
エムケ　浅井晶子訳　2800円

RCT大全
リー　上原裕美子訳　3200円
もうダメかも　死ぬ確率の統計学
シュピーゲルハルター他　松井訳　3600円
アントフィナンシャル
廉薇他　永井麻生子訳　3200円
スミス・マルクス・ケインズ
ヘルマン　鈴木直訳　3600円
反穀物の人類史
スコット　立木勝訳　3800円
ピダハン
エヴェレット　屋代通子訳　3400円
専門知は、もういらないのか
ニコルズ　高里ひろ訳　3400円

ファシズム　10月配信開始
オルブライト　白川・高取訳　3000円
レジリエンス思考　10月配信開始
ウォーカー／ソルト　黒川耕大訳　3600円

子どもたちの階級闘争
ブレイディみかこ　2400円
習得への情熱　チェスから武術へ
ウェイツキン　吉田俊太郎訳　3000円
サードプレイス
オルデンバーグ　忠平美幸訳　4200円
死すべき定め
ガワンデ　原井宏明訳　2800円
意識と感覚のない世界
プリスビロー　小田嶋訳　2800円
中国くいしんぼう辞典
崔岱遠　李楊樺画　川浩二訳　3000円
テクニウム
ケリー　服部桂訳　4500円

第一印象の科学
トドロフ　中里京子訳　3800円
スマートマシンはこうして思考する
ジェリッシュ　依田訳　栗原解説　3600円
「第二の不可能」を追え！
スタインハート　斉藤隆央訳　3400円
ウイルスの世紀
山内一也　2700円
ウイルスの意味論
山内一也　2800円
失われてゆく、我々の内なる細菌
ブレイザー　山本太郎訳　3200円
生命、エネルギー、進化
レーン　斉藤隆央訳　3600円
タコの心身問題
ゴドフリー=スミス　夏目大訳　3000円
恐竜の世界史
ブルサッテ　黒川耕大訳　3500円

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435
みすず書房
www.msz.co.jp　ニュースレター（月2回配信中）　ウェブサイトよりお申し込みください
ツイッター www.twitter.com/misuzu_shobo　インスタグラム www.instagram.com/misuzu_shobo/

騒乱の時代の異色作、待望の初訳

バーナード・マラマッド
《テナント》
青山南訳

マラマッドが遺した八冊の長編小説のうち、唯一、紹介が遅れていた『テナント』を名手の翻訳で刊行する。

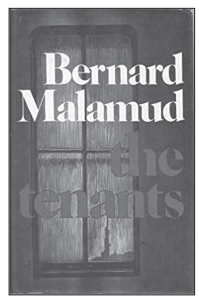
「レサーは、さみしい鏡のなかの自分の姿をチラッと見ながら、本を終わらせるために目を覚ます。真冬に、生きた土の臭いがした。」

レサーはユダヤ人作家、再開発のニューヨークで立ち退きを求められながら、この小説を書き上げるまではと居座る最後の住人（テナント）。ところが空いているはずの別室からタイプライターの音がする。勝手に入り込んだ作家志望の黒人ウィリーが「書いている」。そこから始まる壮絶な闘いが、この長編の主筋とまずは言える。

一九六〇年代後半、公民権運動から派生していく過激な黒人の運動、ベトナム戦争への反対行動から発展していく若者たちの活動、無秩序な社会の風景。ソール・ベローもフィリップ・ロスも変わった時代に、穏やかなマラマッドも呼応せざるを得なかった。

あと一歩のレサー新作のテーマは「愛」、ウィリーの書きたいのは「ブラック」。男女入り乱れ対立と共感こもごも、コミカルでポップでサイケな『テナント』は、当時まだ知られざるラップまで飛び出す異色作。［アメリカ文学・黒人差別］【一月中旬刊】

（四六判256頁・予二八〇〇円）



《テナント》初版表紙

「仙人画家」初の評伝
安井雄一郎《松田正平　飄逸の画家》

飄々とした画風で高い評価を得ている松田正平（一九一三―二〇〇四）は、洲之内徹、白洲正子など同時代の美術愛好家に愛されながら、一九八四年に日本芸術大賞を受賞するまでほとんど無名に近い画家であった。

八〇年代、松田の郷里・山口県の美術館学芸員として初の回顧展を企画担当した著者は、作品や画家本人との対話を重ね、考察をつづけた。その集大成でもある本書は、同郷で美校同窓のライヴァル、香月泰男との対比、コレクターとして名を馳せた福島繁太郎との師弟関係、画家と深く交わった知己に取材するなど、戦後洋画史に独自の画境をひらいた松田正平の本質に迫る第一級の評伝となっている。

周防灘の美しい風土、終戦直後の焦土で出会ったバラを描くことで「日本人にとっての油絵」を追究した画家の芸術と生涯。カラー口絵、詳細な年譜を付す。［美術］

（A5判・272頁・四二〇〇円）

評伝出版記念　松田正平展

フォルム画廊（東京・銀座、EXIT MELSA　7階）にて19日（土）まで開催中。11時―18時30分、日・祭休廊。

新装復刊

［10月］
翻訳理論の探求
ピム　翻訳理論（1960年代以降）の各パラダイム間の系譜・相違・批判を提示する。「翻訳とは何でありうるのか。」**武田珂代子訳 ¥5800**

［11月］
精神分裂病
精神医学　1
クレペリン　フロイトとならび現代精神医学の基礎を築いた著者の主著。その概念が現在のDSMへと繋がる古典。**西丸四方他訳 ¥8000**

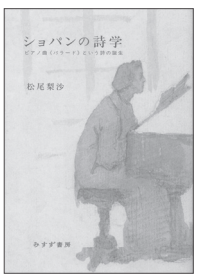
［12月］
PCRの誕生
ラビノウ　PCRを生んだベンチャーを科学社会学の対象として叙述。鮮かなバイオテクノロジーのエスノグラフィー。**渡辺政隆訳 ¥3800**

（www.msz.co.jp/book/revive/ にもご案内）

受賞図書

松尾梨沙『ショパンの詩学――ピアノ曲《バラード》という詩の誕生』が、第25回日本比較文学会賞を受賞しました。

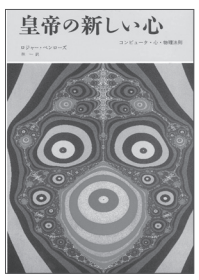
（四六〇〇円）



「Aーは裸の王様だ」ロジャー・ペンローズ ノーベル物理学賞受賞

本年のノーベル物理学賞はブラックホールの研究によりペンローズ博士（オクスフォード大学名誉教授）に贈られました。ゲンツェル博士・ゲズ博士との共同受賞です。

初めて一般読者のために書かれベストセラーとなった**ペンローズ『皇帝の新しい心』**（七四〇〇円）、続く**『心の影』**（全2巻①五〇〇〇円②五二〇〇円、ともに林一訳）いずれも好評重版出来。「AIは裸の王様」と喝破し、心の理解に必要な未知の科学を提示する博士の語りを、ぜひどうぞ。



みすず書房 近刊のお知らせ

2-4月の刊行予定から（書名は仮です）

デヴォン紀大論争
M. J. S. ラドウィック　菅谷暁訳
野生の栞――わが美術雑記　酒井忠康
科学で大切なことは本と映画で学んだ　渡辺政隆
二・二六事件を読み直す　堀真清
共感と精神分析　北村隆人
さまよえる絵筆　弘中智子・清水智世編
エルサレム〈以前〉のアイヒマン
B. シュタングネト　香月恵里訳
数の器　C. エヴェレット　屋代通子訳
建築の領分　内藤廣
ハンナ・アーレント――〈世界への愛〉の物語
E. ヤング=ブルーエル　大島・矢野他訳
人間互換性――AIはコントロールできるのか
S. ラッセル　松井信彦訳
謎のナチス絵画　前田良三
翻訳と文学　佐藤＝ロスベアグ・ナナ編　ほか

（www.msz.co.jp/book/upcoming/ にもご案内）

ご愛読ありがとうございました
本号をもって発行終了

これまで長らくお読みいただき、深く感謝申し上げます。

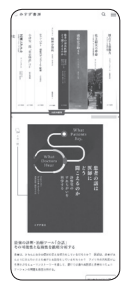
◇本紙の前身「出版ダイジェスト」

前身は、かつて社団法人出版梓会が発行していた「出版ダイジェスト」みすず書房特集版です。「出版ダイジェスト」の創刊は一九四九年（梓会結成の翌年）で、旬刊の情報紙として、毎月21日の総合版の他に、一社または数社連合の特集版が出されました。みすず書房は七六年から特集版に参加し、勁草書房・晶文社・白水社・農文協などと連合を組んだ時期もあります。九四年からは一社で「出版ダイジェスト　みすず書房の本」が二〇一一年秋号（九月、第六四号）まで発行を重ねました。その年十月の総合版（第二三三八号）を最終に「出版ダイジェスト」は休刊しました。

◇三社で　同年十二月、東京大学出版会・白水社と「パブリッシャーズ・レビュー」を創刊。タブロイド判の新聞という形態だけでなく、「みすず書房の本棚」の紙面はほぼ「出版ダイジェスト　みすず書房の本」のスタイルをそっくり引き継ぎました。送料が嵩むなど諸般の事情で発行を終えますが、今後も小社の出版に心を寄せていただけますようぜひともお願いいたします。

文字を大きく見やすく ウェブサイト リニューアル

この秋、みすず書房のウェブサイトをリニューアルしました。スマートフォン、タブレットなどの縦型画面にも対応し、文字が大きく見やすくなりました。また検索メニューを一新、「刊行年で探す」という項目を加えました。電子書籍の刊行タイトル一覧も画像つきで、探しやすいように工夫を施しております。ぜひ一度、お手元の端末にて「みすず書房」と検索し、気になる本の情報をご覧ください。



図書目録2021 出来

毎年この時期に作成している小社の総合図書目録ができあがりました。本年十一月までに刊行した最新刊、ロングセラー、著作集やシリーズ、最近の復刊、オンデマンド版、電子書籍、在庫僅少本まで、ただいま出庫可能な千点余をジャンル別にご紹介。本紙添付の葉書でご請求ください。

■みすず美術カレンダー2021　ご注文はお早めに　特集「ナイーヴ・アートの世界」です。一部六三〇円（税込）に送料手数料を加えた計**七二〇円の切手**をご同封の上、みすず書房営業部カレンダー係までお送りください（〒113-0033 文京区本郷2-20-7）。

みすず書房 営業部だより

コロナ渦での不安な状況が続いていますが、書籍の売上は堅調のようです。都市部での集客は厳しいようですが、郊外店での販売とオンラインでの販売は好調で、全体の売上に寄与しています。初めてオンラインで購入したという読者も多いそうで、利便性に気が付かれた方は引き続き利用されるのでしょうか。

みすず書房は来年で創業七十五周年を迎えます。全国の書店にて記念のフェアを開催いたしますので、店頭に足をお運びいただけましたら幸いです。新刊やロングセラー、社員がお薦めしたい本など、七十五年間の歴史を表現する選書にしたいと思います。ぜひご期待ください。

今年一年、弊社の書籍をご購読いただき、ありがとうございました。来年もどうぞよろしくお願いいたします。

みすず書房・最近の重版より

文学は実学である
荒川洋治　¥3600
昨日の世界　1・2
S. ツヴァイク　原田義人訳　各¥3200
孤独な群衆　下
D. リースマン　加藤秀俊訳　¥3400
全体主義の起原　3［新版］
H. アーレント　大久保和郎・大島かおり訳　¥4800
アウシュヴィッツ潜入記――収容者番号 4859
W. ピレツキ　杉浦茂樹訳　¥4500
スミス・マルクス・ケインズ
U. ヘルマン　鈴木直訳　¥3600
ウイルスの世紀――なぜ繰り返し出現するのか
山内一也　¥2700
科学者は、なぜ軍事研究に手を染めてはいけないか
池内了　¥3400
皇帝の新しい心――コンピュータ・心・物理法則
R. ペンローズ　林一訳　¥7400
ファンタジア
B. ムナーリ　萱野有美訳　¥2400